

# 「対話」の構造と意義

松田高志

## 序

近年「対話」という言葉が、いろいろな所で好んでよく用いられ、一種の流行語にさえなっているが、それは、恐らく我々が今、切に必要としている何ものかを言い表わしているからであろう。

しかしその意味内容は、必ずしも明瞭ではない。時には矛盾し合うような受け取り方も見られる。例えば、「対話」が一方において日常生活の中ですぐにでも実行出来るかのように考えられ、スローガン化されるかと思えば、他方において「対話」の困難さや不可能性が説かれ、時代批判として言われたりする。又「対話」は、親子や夫婦間のように最も日常的な関係において重要であると考えられるかと思えば、逆に生活とは関わりのない何か贅沢事と見なされたりする。このように違った受け取り方が混然としている限り、「対話」は、「理想」や「掛け声」とはなっても、現実的な意味や力は持ちえないであろう。

従ってここにおいて、「対話」の構造や特徴を明確にし、又それを通して、人間にとって「対話」がいかなる意味を持つかを考えたい。それは、「対話」への確かな視点を得ると共に、「対話」において現代の人間が何を求めているかを明らかにすることになろう。そしてこれは、「人間とは何か」の具体的な究明になると思う。

## (一)

「対話」について先ず言えることは、「話し合い」や「議論」や「協議」と違い、問題を解決したり、結論を出す必要がないということである。これは、ボルノーも指摘するように「対話」の重要な特徴である<sup>1</sup>。「対話」は、何か決着をつけるとか、結論に達することによって完結するわけではない。決着や結論がないという意味では、「対話」は常に未完のままである。しかしこれは、「対話」自身の欠陥ではなく、むしろ「対話」の本質に属している。決着をつけたり、結論を出そうとすれば、むしろ「対話」でなくなる。

ここから次のことが言えよう。「話し合い」や「議論」や「協議」は、決着をつけたり、結論を出して完結するが、それは要するに、そういうことをしなくてもよい状態に達することである。それに対し「対話」は、逆にいつ迄も続けられ、一層深まっていくことが望まれる。例えば「議論」において、「対話」と同じようにそれ自身存続することがめざされるならば、それはまさに「議論の為の議論」となり、頽落態に陥ってしまう。

従って「話し合い」や「議論」や「協議」は、何かの為（例えば意志疏通、意見の正しさの

立証、一つの問題の解決の為) になされ、それ自身目的とはならないのに対し、「対話」は、それ自身が目的であり、何かの為の手段としてなされる限り、それは「対話」の墮落と言ってよいであろう。

ところでこの点から言えば、「会話」も決着や結論を必要としない故に、「対話」と同じであるとも言える。「会話」は、日常の簡単な挨拶程度のものからパーティーにおける「高尚なもの」までいろいろあるが、いずれの場合も決着や結論を求めるのはふさわしいことではない。「会話」は、それ自身を目的として楽しみ、いつ迄も続けたいと思えるものでなければならぬ。

しかし「会話」は、やはり「対話」とは異なるであろう。「会話」は、それ自身目的として楽しまれるとしても、例えばその場にいる者が互いに打ち解け、親しくなる為にとか、気晴しの為に、ということは考えられる。とすれば「会話」は、やはり何かの手段、方法であるとも言える。「会話」は、そのような一つの手段としてなされても、その本質を失うということにならないばかりか、例えばゲームと同じだけの効果をあげれば、それは「会話」として成功である。それに対し「対話」は、何か適当なものに代りうる手段や方法ではない。ここから「対話」は、単なる「有用性」の範疇を越え、人間の本来のあり方の問題であると言えよう。

一応以上のように考えられると思うが、ただもう少し言えば、「対話」はこのようなものだとすると、それは、「対話」から「有用性」を除くべきであるということではない。このことについては、又後で、もう少し詳しく述べたいが、ここでは、ソクラテスの「対話」のような教育的なものや、精神療法や聖職者の牧会的活動としての「対話」について少し考えたい。

これらは、以上から明らかなように、操作的立場から一つの方法として行うことは出来ない。もしそうするならば、それは、「対話」の外見を備えているにしろ「対話」とは全く別ものであるであろう。しかしそこにおいて、なお「対話」によってしか得られないものがあるとすれば、その場合はやはり手段としてでなく、人間の本来のあり方として「対話」がなされる他ない。その際、教育的、治療的、牧会的意図は、共に生きる同じ人間としての、相手への人間的、全体的応答のうちに溶け込んでいなければならない。そのような意図は、全体としての「対話」のうちに溶け込んだ一つの願いであり、その成り行きに対してはどこ迄も開かれた態度がとられ、良い結果は、いわば恵みとして受け取られなければならない。

以上において「対話」は、何よりも人間の本来のあり方の問題であることを見て来たが、以下において更にその構造や特徴を探りつつ「対話」とは何かを考えたい。

## (二)

或る教師が、一人の生徒と「対話」出来たとしよう。その場合、教師が教師として、又生徒が生徒としてなすべきことをしたというより、むしろ教師や生徒という枠を越え、同じ人間として互いに存在を認め合ったということではないだろうか。教師や生徒という枠に阻まれているいわば裸の人間と人間の関係がそこに生じたということであろう。役割や地位など何らかの

枠の中にある限り、「対話」はありえない。「話し合い」においては、教師であることや生徒であることを越え出る必要はない。教師の立場や生徒の立場で「話し合う」ことが出来る。「対話」は、一定の枠や立場の中では起りえない。

従って「対話」において、双方は全く対等であり、自由である。それ故互いに相手を対等な者として認め、相手の自由を完全に認めなければならない。

「話し合い」、「議論」、「協議」、「会話」等も、確かに参加者は対等であり、自由でなければならないだろう。しかしこれらの「対等性」は、誰もが自由に意見を出し、同じ権限で決定に参加しようという権利やその前提としての能力の対等性である。それ以上のことは、差当って問題にはならない。そしてそのような「対等性」を確保する為に、それらに参加しよう者は、予め限定されることにもなる。しかし「対話」は、「風景との対話」、「馬との対話」とさえ言われるように、単に権利や能力の対等性でなく、いわば存在と存在の絶対的な対等性であり、予め何もかを締め出すということはない<sup>2</sup>。

しかも「対話」においてその絶対の対等性を認め合うことは、「対話」を始める条件やルールであるというだけのものではない。「話し合い」等では、それは前提条件であり、ルールであるという以上の意味はない。「対話」では、そのような絶対の対等性を認めることは、それ自身積極的な働きであり、「対話」の本質的な要素を成す。まなざしや語りかけにおいて、そのことが互いに確認されるならば、既に「対話」の原形は出来上っているとも言える。

又「対話」の対等性は、「話し合い」その他のように、自分と同じだけのものを相手にも公平に振り分けるといふようなものではない。東山魁夷氏は、そのエッセイ「風景との対話」において、よい絵を画きたいとか、絵になる風景はないかと探し歩いている間は風景に出会えなかったが、「絵を画く望みも、生きる望みも無くなった」時に、風景の方から語りかけてくれたと言う<sup>3</sup>。書名の「風景との対話」は、この体験から来ていると思うが、この体験はまさに「対話」の最も本質的なものを示していると思われる。つまり「対話」は、いわば自分が無になる、あるいは受身になるということが本質的な契機を成しているのである。このことは、重要な点であり、又後で触れたいが、ともかく「対話」の「対等性」は、むしろ自己否定ないし受身として真に行じられるのである。

### (三)

以上のように役割や地位、権利や能力の限定を越え、いわば絶対の「対等性」において「対話」が成り立つとすれば、そのことは、逆にかえって互いの存在の「独自性」を認め合い、それを全面的に発揮しようということである。絶対の「対等性」は、いかなる差異も除外しないし、いかなる差異もこの「対等性」を損なわない。「対話」においてそれぞれの「独自性」は、互いに認められ、高められる。先に述べた役割や地位や能力も、それらが越えられることによって全体の枠であることをやめ、全体のうちの一特性として見られるようになる。

「話し合い」においても、確かに個々の特殊な意見や立場は尊重されねばならない。少数意

見が切り捨てられるとすれば、それは「話し合い」の精神の放棄である。しかし「話し合い」において、個々の特殊な意見が尊重されるのは、あくまでめざされる一般的解決との緊張関係においてである。それは、唯一的、一回的なものとしてそれ自身の方向に高められるということではない。

「議論」は、意見の相違や対立があって初めて成り立つ。しかし、最終的に一方が否定されるにしろ、両者が新しい第三の立場に達するにしろ、ともかく相違や対立が無くなる方向に向かう。両者の対立は、結局過渡的なものであり、より高い立場のうちに「止揚」されるべきものである。それぞれの「独自性」は、真理追求の過程における契機として重要であるとしても、それ自体として重要であるわけではない。

「会話」は、必ずしも自分で感じたこと、考えたことを言う必要はない。一応事柄として興味が持て、楽しめるものであればよいであろう。しかし「対話」においては、知識や情報の交換だけでは意味をなさない。無論それらも含むが、根本において自分なりに感じ、考えたことがなければ「対話」とは云えない。双方が、主体的、独自のである限りにおいて「対話」は成り立ち、又「対話」においてそれぞれの「主体性」、「独自性」は互いにかげがえのないものとして認められ、それ自身の方向へ高められるのである。

ところで「対話」は、常に相手に語りかけ、又相手によって語りかけられるのである。相手の言葉は、他でもないまさにこの相手がこの私に向けて語るものであり、私はまさにこの相手の言葉としてどういう意味があり、又それが私にとってどういう意味があるかを問いつつ受けとめねばならない。抽象的な理論として了解するのではなく、この相手がこの私に語ったものとして主体的に関わらねばならない。又私の言葉も、この私が責任を持ってこの相手に語るものであり、それは相手にとって本質的に意味あるものでなければならない。ここにおいて、自己および相手の人格的「唯一性」の認め合いと自覚は、最も純粋な形で最も強くなされると言えよう。

人格的「唯一性」の自覚は、自明的になしうるものではなく、普通にはむしろ常にぼやけ、失われていくものではないだろうか。普段、他者のもとに立ちどまり、その言葉に真に耳を傾けることは少ないが、又それと同じほど、ありのままの自分を丸ごと受けとめることも少ないであろう。とすれば、自他の存在の認め合いにおいて人格的「唯一性」の自覚が互いに深まりゆくことは、「対話」の特に重要な働きであると云ってよいと思う。

#### (四)

先に「対話」は、役割、地位、能力などの枠を越えたものでなければならないと述べたが、「対話」は又儀礼的、形式的なものからも離れたものでなければならないだろう。少しでも「儀式」や「形式主義」に陥ると「対話」の生命は失われる。「対話」は、日常的な挨拶から深い人生の問題を語り合うこと迄あらゆる形をとりうるし、どのように始まり、どのように展開されるかは予め知ることと計画することも出来ない。その成り行きに対し開かれた態度をとるこ

となしに「対話」は成り立たない。

しかし更に「対話」において、当然のことであるが、見せかけや隠しだてがあってはならない。相手の素顔に接し、本音に触れて初めて「対話」しうるのである。「対話」においてありのままの自分を相手に差し出し、又相手があるがままに受け取らねばならない。

「話し合い」や「会話」も確かに心を開いた態度が必要であろう。しかし「対話」における打ち開かれた態度は、互いに存在全体を認め合い、交流し合うことを意味する。それは、孤独と孤独が触れ合うことであるとも言われるようにプライベートな関係であり、又それに対し互いに責任を持ち合う関係である。

「話し合い」においては、私的な発言や態度は、むしろ避けられるべきであろう。そこでの開かれた態度とは、誰に対しても思ったことを堂々と主張し、誰の意見をもまともに受けとる公正な態度を意味するであろう。

「会話」をするには、こだわりのない打ち解けた態度が必要であるが、そこにおいて「責任」をとる必要は必ずしもない。「会話」は、責任をとる必要がないという気楽さの故に、早く打ち解けた雰囲気になり、又それ以上「深入り」しないように絶えずブレーキがかけられる。

「対話」においては、相手への語りかけは、相手の存在全体への関与であり、同時に自分の存在全体を相手に開くことである。その為には当然互いに真に信頼し、責任を持たねばならない。否、相手によって信じて任されたことを果たす＝応答すること(Verantwortung, responsibility＝責任)が、まさに「対話」であるとも云える。とは云え「対話」は、必ずしも緊迫した雰囲気のものではない。例えば夫婦が、「今日はよい天気ですね」、「本当に」と言葉をかわす時、それは一応普通の「会話」とも云えるが、しかし相手の存在に深く関わり、相手のどのような呼びかけにも答える用意がある限り、それはまさに「対話」と云ってよいであろう。

## (五)

「対話」は、単に知的なものであるとか、情的なものであるとは云えない。一つの語りかけの中にも、知・情・意の全てが含まれ、働いている。しかもそれらが、いずれも積極的な意味を持っている。確かに他の「話し合い」なども、生きた人間の行為として、知・情・意のどれをも除くことは出来ないが、しかし多くの場合、そのうちのどれかが主となり、従となるのであり、「対話」のように全てが積極的な意味を持つとは云い難い。

更に、気分や雰囲気、表情や身振りや姿勢など身体的なもの(あるいは半ば身体的なもの)も、やはり「対話」において全て積極的な意味を持っている。つまりそれらは、単に「対話」をより「対話」らしくするような条件や補助的なものではなく、全体から分けられないものとしてそれ自体「対話」の本質としての「語りかけ」や「応答」を成しているのである。かくて「対話」は、まさに存在全体における出来事であり、存在の全ての面はいわば一つの方向に向かって溶け合いながら、積極的に働いていると云えよう。

しかしこのことは、外見的に見て全身が活動的、能動的であるということではない。例えば

「対話」において「沈黙」が大きな意味を持つことがあろう。その際、「沈黙」は、いろんな意味を持ちうるが、いずれにしても「対話」する当の者にとって積極的且つ本質的な働きをなすのである。それは、あらゆる雄弁に勝って、言葉では云い表わせないものを表わし、訴えるのである。他の「話し合い」などにおいても「沈黙」はありうるが、しかしそれが言葉にも勝る積極的な働きをするということはない。

しかし更に云えば、「対話」においては、言葉も常に「沈黙」から生まれて来る。前もって抱かれている出来合いの言葉や考えをそのまま「対話」の中に持ち込むということは出来ない。「対話」は、一回的、唯一的な、相手への語りかけであり、応答である。その場、その時、その相手に応じ、最もふさわしい言葉が発せられねばならない。どの言葉も、そこにおいて初めて生まれたものでなければならぬ。つまり「沈黙」から生まれて来なければならぬ。

この意味で、<sup>プロパガンディスト</sup>宣伝家や教条主義者は、「対話」に最もふさわしくない者である。しかしこのような極端な場合でなくとも、出来合いの言葉や考えを無神経に持ち込むことによって「対話」が中断するという事はあろう。その点、他の「話し合い」などにおいては、そのことは「対話」に比べ、本質的な誤りとはならないし、特に問題になるということはない。

このように「対話」において、言葉が「沈黙」(概念や「立場」のうちに閉ざされず、その場、その相手、その時の自分の存在という具体的全体に対し開かれている)から生まれ、又それと関係を持ち続ける限り、「対話」はやはり存在全体における出来事であると云えよう。

「対話」は、既に述べたように、役割や地位、権利や能力の枠を越え、個々の存在の「独自性」や人格の「唯一性」が認められ、又一切の粉飾を取払いいわば本音を出し合うことであったが、更に今述べたことも含めて、「対話」が真に存在全体に関わり、又「対話」において存在全体が発現されるということが認められるであろう。

とすれば、ここから例えば次のことも云えよう。「対話」が存在全体に関わるものであるならば、具体的な現実から遊離したものではありえないということである。誰かが「諸宗教の対話」とか「東西文化の対話」ということを計画し、その方面の専門家を集めたとしても、そこにおいて真の「対話」が容易に生まれるとは云い難い。なぜならそこでは存在全体による呼びかけや応答は、簡単には起りえないからである。むしろそのような人為的な場においてでなく、現実の困難な問題に直面し、ぬきさしならぬ状況の中でとにかく「話し合い」を始めようとする時、思いがけなく「対話」が生まれるということはある。「対話」は、具体的状況を抜きにして単に計画的になしうるものではなく、むしろ日常の「話し合い」、「会話」、「議論」などにおいて、一層自己を開き、相手により深く関わる中で思いがけなく生じうるものである。

これ迄、「対話」と「話し合い」その他を比較しながらその特徴を考えようとして来たが、存在全体において成り立つ「対話」は、それらと単に対立するのではなく、それらの働きを含み、全体のうちに溶け込ませるのである。既に述べたように、「対話」は「有用性」の枠の中では成り立たないが、しかし「有用性」を除外すべきではなく、それを独特な仕方を含みうるのである。「話し合い」が「対話」へと発展するということがあるとすれば、そこで「話し合い」が棚上げされるのではなく、全く新たな仕方でも展開され(つまり思いがけない仕方でも解決され)、

「対話」の中に溶け込むのである。「話し合い」において背後にあったそれぞれの隠れた動機や相手への思惑も、今や「話し合い」の内容そのものと同じだけ相手に対し透明になり、それらを含めて全てが相手への語りかけとなり、応答となるのである。しかもそれは、後にも述べるように相手を生かすあり方としての語りかけや応答とならねばならないのである。ここに「有用性」は、その利己性を脱して互いに他を生かし合うものとなるのである<sup>4</sup>。

ここにおいて、自己の狭い主観性、利己性が破られ、本質的に開かれたあり方をなしうる故に、主観性、利己性と一体となった日常的現実にとらわれ、振り回されることもなくなる。この点だけから云えば、ボルノーが云うように「対話」は、ある種の「暇 Muße」において、つまり日常の煩わしさから解放され、自由になった状態において成り立つとも云える<sup>5</sup>。しかし「対話」は、そのような自由なあり方においてむしろ日常的現実をまともを受けとるのではなければならない。「対話」は、解放された自由な雰囲気が必要とする故に、日常的な利害得失の現実から離れた所において成り立ちやすいと云われるかもしれないが、しかし何ものをも排除しない存在全体における出来事として、実際の家庭生活や実社会のただ中でその具体的現実をまともを受けとることにおいて成り立つものの方が、真に「対話」と云うにふさわしいであろう。

ところで日常的現実には、普通には極めて具体的、全体的な世界と思われているが、しかし例えばA・ゲーレンの「負担免除」Entlastung の概念に典型的に見られるように、実際には極めて主観的、一面的なものである<sup>6</sup>。科学技術的見方や経済主義的見方（人や物を全て経済的価値において見ようとする見方）が社会のうちに肥大している現代において、この傾向は益々強まっていると云わねばならない。従って「対話」は、日常生活から離れた贅沢事ではなく、日常的現実のただ中であってむしろ一層具体的、全体的な現実を取り戻していくものとして不可欠のものと云える。ここに、「対話」が特に現代の人間によって切実に求められる理由の一つもあろう。

## (六)

「対話」は、既に述べたように単に知識や情報の伝達や交換を意味しない。又一个の意見に対し反対意見が出され、結局それらが「止揚」されて第三の立場に達するというような図式だけで考えることも出来ない。「対話」においては、相手と同じ意見を述べることも出来るし、相手の意見にただ肯くというだけでもよい。これは、「議論」などと比べると奇妙に思えるが、しかし実際にこのような場合が多いし、これだけで「対話」として十分に成り立ちうるのである<sup>7</sup>。

「対話」において、一方の意見を他方が認めることは、「他者」による全く自発的な認めとしてその確証は重い意味を持つ。しかもその認めは、相手の存在全体を認めることと一つである。しかし意見の面だけに限っても、それは単に確証されるというだけのことではない。

「対話」は、既成の知識や情報の受け売りではなく、あくまで自分で感じ、考えたことを語り合うのであり、それは常にその人間の全人的参与を伴っている。つまり関心の持ち方やその

度合い、個人的な経験や個性による色合いを含み、更に云えばその人間の生の全体とつながっているのである。従って同じ言葉や意見であっても、それが主体的なものである限り、それへの個々独自の全人的参与によって、互いに啓発し、学び合える。自分の云ったことに対し、相手が生き生きとした関心を示すだけでも、自分の意見は、確かなものとなるだけでなく、生きたものとして、従って他の可能性へと広がり、つながりうるものとして再発見されるのである。教師が生徒に何か云い、生徒がそれを全身で受けとめた時に、その生徒の態度から教師はその云ったことの重さや広がりやを教えられるが、まさにこのようなことが起りうるのである。

「対話」は、無論このように同意し合うものばかりでなく、意見が対立し合う場合もある。この場合、相手の真意を理解しようと努めることとそれを受けとめて自分の立場を問い直すことが一つのこととして行われる。相手の真意を理解することは、相手の身になり、相手の存在全体から理解することである。つまり相手の存在全体を相手自身から（こちらの主観的立場からではない）生かす方向において真意を捉えようとする。従って相手の言葉から相手の存在全体を理解しようとすると共に、相手の身になることによって相手の存在全体からその言葉の真意を理解するという一種の循環的働きを行うのである。そしてその中で、相手の存在全体を生かす真意の方向において、相手の意見を肯定することもあれば、又改めて批判し、反駁することもある。但しそれと一つに、相手の真意はまさに自己に向けられたものとしてそれを生かすべく自己を問い直すのでなければならぬ。相手の意見を肯定するのも反駁するのも、その真意を生かすことであり、それは相手の存在全体を生かすことであると共に、自分の立場が問い直され、自分の存在全体が生かされることである。

無論このことは、容易に起りうることではない。このことが、まさに「対話」を困難にしているとも云える。しかし「対話」において、少くともこのことが起りうると信じられていなければならない。即ち、自分だけでなく、相手の存在全体をもそのままに（つまりこちらがこうだと思っている限りの相手ではなく、自分の知らない面を全て含む。そしてこれは又自分自身についても云える）包み、そこから互いに理解し合えるような場を信じ、それに向かって自己を開かなければならぬ。そもそも一人の人間を「対話」の相手として認めることは、既に自己の立場を究極のものとしせず、このような自他を共に包む場を信じてそれに向かって自己を開くことを意味している。そして「対話」する中で、相手の働きかけによって実際に自己の狭い立場が破られ、そのような場が開かれていくのである。

従って先に述べた、同じ意見を述べ合うとか相手に同意することも、存在全体として理解し合える場からの同意である。自己の主観的、利己的立場における同意ではない。先に「対話」は、プライベートな関係であると述べたが、それは個人の一回的、唯一的出来事であるという意味であって、馴合いや甘えのように互いの利己的立場におけるつながりを意味するわけではない。普段から親しくしている者と「対話」出来たと思える時、それは、それ迄意識していなかった相手の「他者性」に気づき、その「他者性」において、つまりその独自の存在の全体において相手を受け取りうる場<sup>ば</sup>に自己を開いたということである。親しい者同士においてかえって「対話」が難しいとすれば、それはまさにその親しさの故に「他者性」を認め難いからであ



ろう。

ところでボルノーは、「対話」を「真理の場」として捉え、その際、既に述べたような「他者による確証」と共に、「共同による発見」を考えている<sup>8</sup>。即ち、孤独な、モノローグ的思惟は、一定方向にしか展開しえないのに対し、「対話」においては、相手の思いがけない応答によって創造的な思惟が発火しうるのである。このことは、大いにありうるであろう。

しかし更に云えば、「真理」認識は、「対話」において、「他者性」に直面することによってその主観性の枠が破られ、もはや私によって所有されたものとしてでなく、私を越え、私と他者の存在全体を包む場において、私がそれに仕え、それに生かされるものとして存在する。それは、各々の独自の全人的参与によって次々に豊かにされつつ、そのようなものとして真に生きたものとなるのである。ここにおいて「対話」は、「真理の場」と云うに真にふさわしいであろう<sup>9</sup>。

### (七)

真の「対話」においては、相手の呼びかけに対し応答が発火すると云われる<sup>10</sup>。そのような応答は、相手に触発されたものでありながら、しかし又通常の意識的自己より一層根源的な所からの発動である。それは、深い呼応の出来事である。「対話」の一番の面白さは、おそらく「他者」の呼びかけと根源的な自発性がこのように一つに結びついていることであろう。「他者」の呼びかけに呼応して根源的な自己からの自発が起る。ここにおいて、意識的自己を中心にした自己の限られた「全体性」を越えた一層ひろがりのある「全体性」が発現する。

例えばブーバーによれば、「対話」において……、私の云う言葉は、云われることを欲している……、その言葉は、自然に生まれたものであるが又作品であり、発芽したものであるが又造形されたものである、と云われる<sup>11</sup>。又、人間のうちに言葉があるのではなく、言葉のうちに人間がある<sup>12</sup>、人間は愛のうちに住む……、私に愛が附着しているのではない、とも云われる<sup>13</sup>。

このような言葉や愛は、通常の意識的自己より一層根源的な所からの自発性を含みながら、しかも単に自己において成り立っているとは云えない。ブーバー自身の言葉で云えば、「双方の固有な領域」としての「間」Zwischen の領域において成り立っているのである<sup>14</sup>。しかし「間」という概念は、「対話」する二人の者によってなお限定されたもののように受けとられやすいであろう。その真意から云えば、やはり先に述べたように、自己と共に他者の存在全体を包み、成り立たせ、そこから互いに分かり合える場でなければならぬであろう。このように自己においてでなく、自己を越えた所において成り立つ言葉や愛が、やはり自己の「全体性」を成すとすれば、その「全体性」は、意識的自己を中心としたいわば閉ざされたものではなく、むしろどころ迄も開かれた「全体性」であると云ってよいであろう。

ところで、このような事が起りうる為には、何よりも「他者」の呼びかけを聞きとることが出来なければならない。それは、東山魁夷氏の体験におけるように、いわば自分を無にして初

めて起りうることである。自分の意図したものだけを追い求めるあり方からはこのことは起りえない。そのような利己的、意図的自己を否定することによってのみ、「他者」の呼びかけを聞くことが出来る。東山氏は、「特に珍しい眺めというわけではない」のに「こんなに美しい風景」を、「輝く生命の姿」を画かすにはおれない<sup>15</sup>。このような応答は、「他者」のうちに生きることであるとも、「他者」を真に生かすことであるとも云える。「対話」は、まさに相手を存在全体において真に生かし合い、高め合うことであると云ってよいであろう。

ここにおいて、自己を無にすることと「他者」の呼びかけを聞くことと自己の根源からの応答の発動は一つに結びついている。否、それは一つの出来事であり、別々に切り離すことは出来ない。「対話」は、存在の「全体性」において成り立つ（又「対話」において存在の「全体性」が発現する）が、その「全体性」は、「他者」に対し開かれ、「他者」に生かされつつ、「他者」に生きる「全体性」である。かくて「対話」において、「他者」に生きることと自己に生きることは一つである。それは、単に道徳上の当為としてでなく、存在の「全体性」としてそうなのである。

以上のように云えるとすれば、人間の本来的なあり方、つまり人間の本来的「全体性」を生きるあり方としてまさに「対話」を考えることが出来よう。

「対話」とは何であり、又特に現代の人間が「対話」に何を求めているかは、以上のような観点から明らかにしていくことが出来ると思われる。

#### 註

1. O. F. Bollnow, *Das Doppelgesicht der Wahrheit* (1975), S.38.
2. 厳密な意味での「対話」は、ただ成熟した大人同士によってしかなしえないとも考えられる。「対話」において、相手の身になり、その立場に立って相手を理解し、且つその目で自分を見直すことが出来ねばならないとすれば、確かにそれは成熟した大人だけに可能である。しかし本文に述べているように相手の存在全体を受けとろうとし（このことのうちに潜在的にはあるが、以上のような相手の身になるという方向が含まれている）、又存在全体を挙げて相手に向かうということがあれば、「対話」と云ってよいと思う。  
ブーバーは、彼の「教育論」の中で、「対話的關係」には一方向的な *Umfassung* の関係と相互的な *Umfassung* の関係があるとしている。(M. Buber, *Werke* 1. Bd. 1962, S.804 f.) *Umfassung* は、上に述べた「相手の身になって相手を理解し、且つその目で自分を見直す」という意に近いと思うが、要するにブーバーによれば、「対話」にはそれが一方のみ見られる場合と双方に見られる場合があるというのである。それ故、もとにある関係が、互いに存在全体を挙げて相手に向かい、互いに相手の存在全体を受けとろうとする関係であれば、*Umfassung* が一方だけか、それとも相互に見られるかに拘らず「対話」である。ブーバーにおいては、相互に *Umfassung* があれば、それはより深い「対話」であるが、そうでなくとも例えば大人と子供の間において、それどころか馬との間において「対話」が成り立つと考えている。
3. 東山魁夷、「風景との対話」（昭和42年），13頁。
4. 「話し合い」は、民主主義社会の最も基本的なあり方である。しかし「話し合い」は、本文で述べたようにそれが無くして済む状態をめざすものである限り、結局は個人主義の立場であるとも云える。従って「話し合い」の立場は、「話し合い」そのものを難しくするという事はないだろうか。民主主義社会の基本的あり方である「話し合い」のもう一つ根底に「対話」の立場が考えられなければならないのではないか。拙稿『「話し合い」と『対話』—戦後民主主義教育への一視点—』（関西教育学会紀要第3号所収）参照。

5. O.F. Bollnow, *Sprache und Erziehung* (1966), S.39.
6. A. ゲーレン, 「人間学の探究」(亀井, 滝浦訳, 1972年), 48頁以下参照。ゲーレンによれば, 何かを知覚する場合, その対象の感覚しうる全てを認めているのではなく, むしろ甚だ多くのものを「見落す」übersehen ことによって, その対象のうち自分の行動に必要な全体系(例えばその重さや裏の部分など直接には見えないものを含めて)を一目で「見通す」übersehen ことが出来るのである。このように「高度な見通し」の為に, ぐたぐたした大量の直接的刺激を免れていることを「負担免除」という。
7. この例としては, ゲーテの「ヴィルヘルム・マイステルの徒弟時代」の次の箇所がふさわしいであろう。「この仲間に入ってきて私は, 敢てさう言ひますが, 生れて初めて対話をしました, 生れて始めて私の言葉の最も本来の意味が, 他人の口から更に内容が豊富に更に充実し更に範囲を 廓大されて私のところへ帰って来ました, 私の漠然と感じてゐたものが私にははっきりして来ました, そうして自分が考へたことを, 私は目に見ることを教へられたのです。」「『自分自身の確信を他人の口から聴くといふことは』と彼女は声を張った, 『まったく嬉しいことです!。他人が私達の考へに全然同意してくれる時に, 私達は初めて私達自身になれるのです。……』」(小宮豊隆訳, 岩波文庫・下巻) 42頁
8. O.F. Bollnow, *Das Doppelgesicht der Wahrheit*, S. 28 ff.
9. 「対話」を「真理の場」として捉えるならば, 当然ソクラテス・プラトンの「対話」について考える必要があるが, ここでは本論文と直接関係のある点だけを若干指摘するにとどめる。ソクラテスのいわゆる「無知の知」は, 唯一なる「智者」(神)への信と一つになったものとしてソクラテスの究極的な自己理解を示すものであると思われるが, ここから例えば「愛知」(哲学)的生き方も出てくる。しかしそれと共に(そしてそれと切り離せない仕方で)「対話」も生まれてくる。「無知の知」は, 自己の立場を絶対化せずどこ迄も開かれたままにしておくことである。これなくして「対話」は成り立たない。(そして又「他者」の思いがけない語りかけや応答によって, 一層自己の「無知」が知らされる。)そして何よりも「愛知者」は, 知を所有する「智者」に比べ, 知を所有せず(「無知」), 常に動的に知を愛し求める者として「対話」せずにはおれない。ソクラテス・プラトンにおける真の知とは, 知即善であるような知であり, 存在全体を変革し, 救済しうる実存知であり, 根本知であろう。だからこそ「直接伝達」出来ないのであり, 「助産術」=「対話」が必要なのである。ただプラトンの対話篇を読む限り, そこでの知は, 実存知, 主体知というより甚だいわば理論知に偏しているように思われる。しかし例えば「第七書簡」の有名な次の箇所を見れば, 「対話」が生活全体を通してなされ, その知は, 単なる理論知ではなく, 真に実存的な知であることが知られる。  
「そもそもそれ(私が心を砕いている事柄)は, ほかの学問のように, 言葉で語りえないものであって, むしろ, 生活を共にしながら, その問題の事柄を直接に取り上げて, 数多く話し合いを重ねてゆくうちに, そこから, 突如として, いわば飛び火によって点ぜられた灯火のように, 魂のうちに生じ, 以後は, 生じたそれ自身がそれ自体を養い育ててゆくという, そういう性質のものなのです。」(長坂公一訳, プラトン全集14, 岩波書店) 147頁, 次頁。
10. M. Buber, *Werke* 1 Bd. S. 797.
11. *Ibid.*, S. 285f.
12. *Ibid.*, S. 103.
13. *Ibid.*, S. 87.
14. *Ibid.*, S. 405.
15. 東山魁夷, 前掲書, 12頁, 次頁。

原稿受理 1980年9月9日

## Die Struktur und die Bedeutung des "Dialogs"

Takashi Matsuda

Heutzutage ist überall vom "Dialog" viel Rede, aber man weiß nicht immer exakt, was er bedeutet. Hier möchte ich klarmachen, was er ist, und warum wir, moderne Menschen, ihn so stark suchen.

(1) Der Dialog braucht keinen Schluß zu haben und ist also kein Mittel für einen praktischen Zweck, sondern die eigentliche Lebensweise des Menschen selbst. (2) Er setzt die absolute Gleichberechtigung der Teilnehmer voraus. (3) Gerade in ihm wird jede Eigentümlichkeit und Einzigkeit des Menschen bestätigt und erhöht, indem jeder seinen Partner anredet und ihm antwortet. (4) Dabei zeigt sich der Teilnehmer seinem Partner rückhaltlos, wie er ist, und nimmt den Partner auch freimütig an, wie dieser ist. Deswegen muß jeder sich vertrauen und verantwortlich sein. (5) Am Dialog nimmt jeder mit seiner leib-seelischen Ganzheit teil und darin verwirklicht sich sein ganzes Sein. Deshalb ist der Dialog ganz konkret und nie trennbar von der alltäglichen Wirklichkeit. (6) Er ist der Ort der Wahrheit, wo sie kein Besitz des Menschen mehr ist, sondern das ist, was der Mensch mit dem ganzen Wesen dient, so daß sie lebendig wird und sich bereichert. (7) Er ist der Vorgang, wo die Verwirklichung des ganzen Seins des Anderen und zugleich die Verwirklichung des Selbst geschehen, und dabei ist die Ganzheit des Menschen nicht mehr geschlossen, sondern offen für den Anderen und darüber hinaus für den Ort, auf dem beide beruhen, wirklich gegenseitig verstehen und miteinander verbinden können.